

[書評] Arnulfo, Valdivia-Machuca, State and Business Groups in Mexico: The Role of Informal Institutions in the Process of Industrialization, 1936-1984

著者	星野 妙子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	47
号	7
ページ	79-82
発行年	2006-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/598">http://hdl.handle.net/2344/598</a>

Arnulfo Valdivia-Machuca,

*State and Business Groups  
in Mexico: The Role of  
Informal Institutions in  
the Process of Industrial-  
ization, 1936-1984.*

New York and London: Routledge,  
2005, xviii + 284pp.

ほし の たえ こ  
星 野 妙 子

輸入代替工業化期のメキシコの政府・財界関係は、これまで多くの研究者が取り上げてきた研究テーマである。その背景にはこの時期にみられた一党支配の政治体制において、支配政党の支持基盤から企業家層が排除されていたにもかかわらず、彼らの利益に沿った工業化政策が展開されたこと、また、支配政党の支持基盤である労働者階級、農民階級に工業化の果実が十分に行き渡らなかったにもかかわらず、政治の一応の安定が長期にわたり保たれたことがある。政府・財界関係が研究者の関心を集めるのは、ここにこれらの現象を理解する鍵があると考えられてきたためである。本書もメキシコの輸入代替工業化期における政治の安定と工業化の進展を政府・財界関係から解明するという同様の問題関心から書かれている。本書の先行研究に対する新しさは、新制度論という1970年代以降、歴史学、社会学、政治学、経済学の分野で影響力を持つようになった理論的枠組みを用いてメキシコの政府・財界関係の特質を解明しようと試みている点、特に政策立案における非公式のネットワークの役割に注目している点にある。

著者について評者はわずかな情報しか入手していない。著者は2000年以降に英国ケンブリッジ大学

から経済学博士号を授与され、その後米国トゥレン大学に研究生として所属した経歴を持つ。2005年現在、メキシコのメキシコ州自治大学で教える傍ら、メキシコ州政府の国際問題担当コーディネーター職に就いている。本書巻末の膨大な引用文献のなかに自筆論文が1本も含まれていないことから、研究経歴が短く、本書が著者の博士論文を基に執筆されたものではないかとの推測が成り立つ。新制度論の文献レビューを丹念に行っていること、実証分析のための新資料の発掘を精力的に行っていることなどの事実からしても、その可能性は高い。

本書の章構成は以下のとおりである。

第1部 理論的枠組み

第1章 制度を理解する

第2章 非公式制度 その特定

第2部 メキシコにおける非公式の政策立案制度  
1936年～1984年

第3章 ICESの歴史的発展

第4章 制度変化とICES

第5章 メキシコにおける非公式性の構造

第3部 実証的・理論的結論

第6章 公式性、非公式性、そしてメキシコの  
経験

本書はこのように3部6章から成り、第1部では理論的枠組みとなる新制度論の検討が、第2部ではメキシコの政府・財界関係の実証分析が行われ、第3部で結論が示される。以下、順を追って概要を紹介したい。

第1章では「制度とは何か」、「制度はどのように発生、存続、変化するのか」という論点をめぐり、新制度論の検討が行われる。「制度とは何か」については、まず制度がどのように個人の行動に影響を与えるかが検討される。ここで提起されるのが「調停された合理性」(Mediated Rationality, 大文字は著者)という分析装置(analytical device, p.14)である。個人の行動には規制メカニズム、規範メカニ

ズム、認識メカニズムの3つが同時に働いている。これらの相互作用により「調停された合理性」が創られ、それが個人の政治行動を決定すると著者は主張する。そしてそこから、「制度とは、規制、規範、認識の3つのメカニズムから成り、参加者の行動に影響を与え、現実性を高めることで参加者間の関係を構造化するシステムである」(p.15)という著者の制度の定義が導き出される。次に制度の発生、存続、変化のライフサイクルが論じられる。発生段階では、既存の制度構造と個人の価値、役割、観念に規定された選択肢のなかから新しい制度が生まれ、合意の形成と、原則の確立・敗者の利益の調整・公衆に向けた制度の正当化の3つの要件から成る制度の実体化が進む。存続段階では、正当性と安定のための変化が要件として付け加わる。安定のための変化は言い換えれば環境変化への適応であり、次段階の変化、すなわち抜本的な変化であるパラダイム変化とは区別される。パラダイム変化の段階には既存制度の正当性の喪失、誤った対応による危機の深化、新制度をめぐる抗争、新制度の受容の過程が続く。これで制度のライフサイクルが一巡し、新たな発生段階が再び始まると指摘される。

本書の実証分析の焦点はメキシコの政策ネットワークである。そこで第2章では第1章で検討された制度と政策ネットワークをつなぐ議論として、非公式制度の理論的検討が行われる。まず政策ネットワーク論の文献レビューから政策ネットワークが非公式制度であることが確認される。次に第1章で検討された制度(厳密には公式制度)と対比させて非公式制度とは何かを検討される。著者によれば非公式と公式との違いは、非公式制度は個人の行動に影響を及ぼす規制と規範が書かれたものではないということ、そのため規制メカニズムと規範メカニズムが機能するうえで信用が重要な役割を果たすことである。そこから「非公式制度とは、書かれていない規制、書かれていない規範、認識の3つのメカニズムから成り、参加者の行動に影響を与え、現実性を高めることで参加者間の関係を構造化するシステムであり、影響、現実性の程度は信用に大きく依存する」(p.41)という著者の非公式制度の定義が導き

出される。次に非公式制度の発生、存続、変化のライフサイクルが論じられる。基本的には公式制度と似通ったライフサイクルをたどる。発生段階で非公式制度がなぜ選択されるかについては、制度構造上、非公式が唯一の選択だった、あるいは目的達成のために非公式が好ましいと判断された、などの条件の存在が指摘される。

以上の理論的考察を受けて第3章以降でメキシコの政策ネットワークの実証分析が行われる。冒頭で「非公式諮問・交換システム」(Informal Consultation and Exchange System: ICES, 大文字は著者)という本書のキー概念が示される。ICESとは輸入代替工業化期のメキシコに成立していた7つの政策ネットワークの集合で、経済の安定と工業化を目的に、大統領と有力閣僚、官庁、有力企業家、法定および任意の経済団体、企業等間に形成された、産業政策をめぐる諮問と資源交換の非公式のシステムである。第3章ではICESの主要な参加者が紹介された後、第2章で示された非公式制度のライフサイクル論に沿って1936年から70年までのICESの発生の前段階および発生と存続の過程が示される。第2章との関連で非公式制度が選択された理由を述べれば、メキシコ革命(1910~17年)後の再建期に存在した3つの条件、すなわち、形成過程にあった国家構造からの企業家の排除、社会に対する国家権力の相対的な強さ、経済成長の必要などの条件が非公式制度の採用を促したと指摘される。第4章では1970~84年に該当するICESのパラダイム変化の過程が、第3章と同じく非公式制度のライフサイクル論に沿って示される。第5章ではICESを形成する7つの政策ネットワークが、4重の同心円を用いて図示される。中心円に位置するのは大統領である。2番目の円には主要閣僚、中央銀行と政府開発銀行の総裁、有力州の知事、時の大統領が覇権にする企業家が位置する。3番目の円に位置するのは全国銀行家協会、少数の大企業家から成る任意団体CMHN、経済団体の頂上組織CCEである。4番目の円には法定経済団体、多国籍企業、国内大企業、在墨米国商工会議所、円の外には任意団体COPARMEX、業種別の法定経済団体が位置する。中小企業はネットワ

ークから排除されている。円の中心近くに位置する参加者ほど政策形成への影響力は大きい。これらの参加者の間に特徴の異なる政策ネットワークが形成され、交渉や、情報、資金、影響力、特権、政治的支持などの交換が行われた。著者は参加者間を矢印で結ぶ形で7つの政策ネットワーク（各ネットワークの名称は「金融中軸」、「民族主義者グループ」、「官僚主義的形式主義」、「大統領が覇権にする企業家」、「省庁特長的」、「地方」、「多国籍企業」）を表し、さらに、民間部門の参加者のICESを介した政策への影響力をみるために、参加者ごとに5つの指標（直接の交渉相手、たまに交渉する相手、交渉開始の容易さ、大統領との面談可能性、ICESを通じ交換される資源）について情報を表に整理している。このような試みは先行研究では行われておらず、著者によるはじめての試みであることが強調される。

結論部分の第6章では第5章までの議論が整理される。ここで興味深いのは、ICESを構成する政策ネットワークが、先進諸国では公式制度が担う産業政策立案の機能を代替したという指摘である。企業家が公式制度から排除されたというメキシコ革命後の時代状況がICESの発生を促した。交渉と交換の公式制度が十分に発展しえない環境においては、補完的にICESのような非公式制度が形成される可能性が高いことが指摘され、非公式制度論が他の発展途上国へも適用可能であることが示唆される。

本書は著者独自の分析装置の提起、理論と実証の接合、新資料の発掘という3つの点で、意欲的な研究である。本書のメリットとデメリットもこの3つの点に関わると考えられるので、以下この3点について論評したい。

第1に独自の分析装置として提起された「調停された合理性」について述べたい。これを提起するにあたり、著者は新制度論の代表的なレビュー論文であるHall and Taylor (1996)に依拠して、新制度論の主要な潮流を歴史的制度論、合理的選択制度論、社会学的制度論の3つに整理し、特徴を検討し

ている。その結果として著者は、3つの潮流のいずれもが単独では複雑な現代の政治行動を説明できないが、3つの潮流の融合によりそれが可能になると指摘する。その融合の試みが前述の個人の行動に影響を与える3つのメカニズムである。規範メカニズム、認識メカニズムを歴史的制度論と社会学的制度論から、規制メカニズムを合理的選択制度論から借りているといえる。新制度論の議論に一石を投げようとする著者の意欲は高く評価するが、評者は次のような疑問を持った。第1の疑問は、「調停された合理性」は合理的選択制度論の「限定された合理性」(bounded rationality)と基本的に変わりがないのではないかという点である。著者自身もそのような批判がありえることを認識しており、「限定された合理性」が個人の合理性を限定する条件として情報制約のみを想定するのに対し、「調停された合理性」は認識、規範という制約条件も含む点で異なる主張する。しかしこれに対しては次のような批判がありえる。第1に制約条件を加えただけで、やはり「限定された合理性」の枠を出ていないという点、第2に「限定」を「調停」に言い換えるのなら、制約条件間の調停のあり方が言及されるべきではないかという点である。どのように「調停」されるかについての説明はない。第2の疑問は、分析装置としての有効性である。3つのメカニズムが包括的であり抽象的であるために、一般論としては理解できても、著者が主張するように分析装置として具体的な事象に適用可能であるかは疑問である。事実、本書の実証分析部分では非公式制度への参加者が「調停された合理性」に基づき行動することは前提とされており、それ自体は検証されていない。ここから理論と実証の接合という第2の論点が浮かび上がってくる。

著者は新制度論の理論的考察の成果を、メキシコの政府・財界関係の実証分析に適用しようと試みている。試み自体は高く評価するが、理論と実証がうまくかみあっていないというのが評者の意見である。理論的考察の主要な論点は「調停された合理性」と「(非)公式制度のライフサイクル」の2つと考えられるが、第1の疑問で述べたとおり、実証分析では

「調停された合理性」は所与のものであり検証の対象とはされず、主に検討されるのは著者が非公式制度のひとつとみなす ICES のライフサイクルである。理論的考察では「調停された合理性」から「(非)公式制度」が導き出され、続いてそのライフサイクルが検討された。そのような論理展開を考えると、実証部分において「調停された合理性」の分析を欠くことは、ライフサイクル分析の論拠を不確かなものにしてしまうと評者は考える。

第3の論点として新資料の発掘があげられる。アーカイブ資料を精力的に猟歩している点、数多くの重要人物へ聞き取り調査を行っている点は、本書のメリットとして高く評価されよう。評者が本書に注目したのも第1に、聞き取り調査の対象にアクセスが容易ではない大統領経験者をはじめとする多数の著名人の名前が並んでいることによる。発掘された新資料の質と量において、先行研究の Derossi (1971) や Camp (1989) に比肩するといえよう。しかし難点は、新資料の発掘によって先行研究における定説に修正を迫るような新たな発見が導き出せていないことである。ICES のライフサイクル論は基本的には先行研究に依拠して書かれており、新資料はもっぱら先行研究の定説を補強する役割を果たすに留まっている。新たな発見という点で独自性に乏しいためか、実証分析部分では著者は政策ネットワークの図示を独自の試みとして強調する。しかし図

示したことでわかりやすくなったということはあるものの、内容的には先行研究で叙述表記されてきた以上のものを示していないというのが評者の意見である。かえって図示したことにより、ライフサイクル論で論じたように刻々と変化するはずの政策ネットワークが固定的、静態的なものとして描かれるという問題もある。

以上の論評を短い例えで言い換えるならば、新しい調理法、新しい素材という看板に惹かれて新規開店の店に入ったが、出てきたのは定番料理だったというところであろうか。画期的とまではいかないまでも、研究者としてのキャリアの第一歩を飾るに相応しい意欲あふれる研究である。著者の今後注目したい。

#### 文献リスト

- Camp, Roderic Ai 1989. *Entrepreneurs and Politics in Twentieth-Century Mexico*. Oxford: Oxford University Press.
- Derossi, Flavia 1971. *The Mexican Entrepreneur*. Paris: Development Centre of the OECD.
- Hall, Peter A. and R. C. R. Taylor 1996. "Political Science and the Three New Institutionalism." *Political Studies* 44(5) 936-957.

(アジア経済研究所地域研究センター)